サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～Berserker　Princess～

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ　Ｐｒｉｎｃｅｓｓ～

【Ｎコード】
Ｎ２７５１Ｙ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
サドで邪悪な召喚獣ｉｆシリーズ。第４弾です。今回のヒロインはまさかの『清水美春』です。人外父娘対いかれた科学者『前田理音』の対決はどうなるんでしょうか？

予習問題

『マイエンジェル、ドウシテオトウサンカラニゲルンダイ』

「こないで変態！！」

幼い日の記憶、かなり外れた父親を持つ少女『清水美春』は背後に真っ黒なものをまとった父親から逃げるように近所の公園を逃げ惑っていると、

「リオ、どうしよう。変態がいるよ！？」

「変態？　あれが噂に聞くロリコンか？」

自分達から距離を取って行く人々のなかに同年代の少し頭が足りなさそうな少年と一見、少女に見えるような少年の姿が目の前に立っている。

「ど、どけて！！」

『ミハル、オトウサンガ！！』

美春は目の前に現れた少年2人にどけるように叫ぶが少女の足ではいつまでも大人の足から逃げきれるわけもなく、父親が美春に向かい飛びかかろうとした時、

「リオ、な、何をする気！？」

「決まってるだろ。変態や犯罪者は血祭りにあげる。社会が見逃す

んだ。俺がぶちのめしても問題ないだろ」

美春の目の前の少年のうちの1人は口元を緩ませると懐から花火を取り出し、美春に飛びかかろうとした父親を撃ち抜いて行く。

「な、何なのですか！？」

「リ、リオ、やりすぎ！？」

「おい。呆けてないで逃げろ。その程度では止まらないみたいだぞ」

美春は何が起きたかわからないようで目を白黒させるが花火を放った少年は美春の父親に止めを刺すに至らなかったと舌打ちをして美春に逃げるように言い、

「は、はいです」

『ワタシトマイエンジェルノジャマヲスルノハドコノブタヤロウダ？』

美春は少年の言葉に頷き、駆け出すと彼女の父親は自分に攻撃を仕掛けた少年を敵とみなしたようであり、背後にまとっていた真っ黒なものを殺意に変えて少年に襲い掛かるように駆け出す。

「ちょ、ちょっと、リオ、どうするの！？」

「アキ、下がっていろ。確かに人を威圧するものはあるが攻撃の動きとしては単調であり、当たる事はない」

少年は美春の父親の殺意に負ける気はないようで小さく口元を緩ま

せるともう1人の少年に下げると父親の攻撃を交わしながら花火で父親を撃ち抜いて行き、

「す、凄いです。が、頑張ってください。その変態を打倒してください！！」

『キサマハマイエンジェルニイロメヲツカウブタヤロウカ？　コロスコロスコロスコロスコロス』

美春は自分の事を助けるために身体を張っている少年の姿に彼女の小さな胸は小さく1度跳ね上がり、声を張り上げて自分のために戦う少年を応援するがその言葉は父親にとって少年に向けた殺意を引き上げる事にしかならず、

「リオ、逃げるよ！！」

「アキ、何を言ってる？　犯罪者を前に俺が逃げるわけに行くか。ぶち殺してやる」

少年は不利な状況ではあるが口元を小さく緩ませたまま、懐から今度は毒々しい色の液体の入った注射器を数本取りだし、

「……大振りの攻撃だな。頭に血が昇りすぎるとこんなものか」

美春の父親の大振りの攻撃を少年は交わすと少年の持つ注射器の毒々しい色をした液体は美春の父親の身体に吸い込まれて行き、

『グガガガッガ！？』

美春の父親は壊れた玩具のように前のめりに倒れ込み、

「リオ、無事？」

「あぁ。それより、アキ、逃げるぞ。面倒な事になりそうだ」

「うん」

後ろに下がっていた少年は激戦を終えた少年に声をかけるが大人が少年相手に殺意を向けていた事に誰かが警察を呼んだようで警察官2人が少年2人に駆け寄ってくる姿が見え、少年2人は逃げるように駆け出して行き、

「リオお姉さま？」

美春は命の恩人？に淡い恋心を抱いたようで頬を赤らめ、逃げる少年達の背中を見送るが少年を少女と勘違いしているようである。

第1問

「明久、この後、どうするんだ？」

「そうだね。ボクの家でゲームでもする？」

『吉井明久』は授業が終わり、同じクラスの友人である『坂本雄二』、『木下秀吉』、『土屋康太』の３人と放課後の予定を話し始めた時、

「よ、吉井くん、いますか？」

「あれ？　姫路さん？」

同じ小学校出身ではあるが付き合いが薄くなってきた少女『姫路瑞希』が息を切らして教室に入ってきて明久の名前を呼ぶ。

「よ、吉井くん、大変なんです」

「ど、どうしたの？　大変って何があったの？」

「あ、あの。前田くんのお母さんが事故に遭ったって、私のお母さんから連絡があって」

「前田くんのお母さん？　え？　姫路さん、いきなり、そんな笑えない冗談を言わないでよ」

「冗談なんかじゃありません！！」

瑞希は瞳に涙を浮かべながら、明久の幼なじみの『前田理音』の母親である『前田怜奈』が事故に遭ったと話すが明久はいきなり聞かされた話しに頭が処理できないようであるが瑞希は真実のみを述べているようで彼女の瞳からは大粒の涙が零れ落ちている

「明久、落ち着くのじゃ。姫路の様子を見ると冗談では無さそうなのじゃ」

「う、うん。そ、それで姫路さん、おばさんは大丈夫なの？　そ、それに怜生くんは？」

「そ、それが今は病院に運ばれて手術中だってお母さんから電話があって、前田くんに連絡を取りたいんだけど、おばさんの携帯電話は壊れてしまたみたいでどこに連絡したら良いかわからないって、それで、吉井くんなら、わかるんじゃないかって、怜生くんは私のお母さんと一緒に病院にいます」

秀吉は明久に落ち着くように言うと明久はまだ現実が理解できていないようであり、声を震わせながら瑞希に聞き返すと瑞希は怜奈が手術中だと言う事と理音の弟の『前田怜生』が病院にいる事を話すと明久に理音の連絡先を知らないかと聞く。

「リ、リオの連絡先だね。わ、わかったよ。い、家にあるから、直ぐに帰って電話するよ。あ、あのさ。雄二、秀吉、ムッツリーニ」

「良いから行け」

「……気にするな」

「う、うん。ごめん」

「よ、吉井くん、私も行きます」

明久は顔を真っ青にしながらも友人3人に謝るとカバンを手に取り、急いで教室を駆け出して行き、瑞希も明久の後を追いかけて行き、

「ちょ、ちょっと、吉井、危ないわよ！！」

「お姉さまにぶつかるなんて、どう言う了見ですか！！」

明久は廊下に出た所でクラスメートのドイツからの帰国子女の少女『島田美波』とドリル型の特徴的なツインテールの髪形をした少女『清水美春』にぶつかりそうになるが、

「ゴメン。島田さん、ちょっと、かなり急いでるんだ」

「そ、そうなの？」

明久は今は美波に付き合っている暇もないため、直ぐに駆け出そうとし、美波はあまり見る事のない明久の真面目な表情に少しだけ照れたようで視線を逸らした時、

「よ、吉井くん、待ってください。私も行きます」

「ひ、姫路さん？　ちょっと、大丈夫！？」

息も絶え絶えになった瑞希が明久に追いつき、明久は瑞希に駆け寄り、

「へぇ、ウチには急いでるって言うわりにはその子には優しくする

んだ？」

「ちょ、ちょっと、島田さん、落ち着いてよ。今は本当にそんな事をしてる暇はないんだよ」

美波は明久の態度が気に入らないようであり、明久の肩をつかむと明久は今から自分に起きるであろう惨劇に顔を引きつらせるが、

「す、すいません。本当に時間がないんです。吉井くん、は、早くしないとおばさんが」

「そ、そうなの？」

「う、うん。ごめん。島田さん、本当にボク達は時間がないんだ。詳しい話は雄二達に聞いて。姫路さん、行こう」

「は、はい」

瑞希が明久と美波の間に割って入ると美波は2人の様子にただ事ではない事が起きた事は理解出来たようであり、2人は美波から解放されると明久の家に急ぐ。

第2問

（……3年ぶりか？　あまり、変わってはいないな）

『前田理音』は幼なじみの明久の母親が事故に遭ったと聞かされた時、戻るつもりなどなかったが彼が所属している研究所の恩師に母親の様子を見て来いと研究所を追い出され、生まれ育った街に3年ぶりに足を踏み入れるが、

（……今更、俺があっても仕方ないだろ。あいつが死のうが俺には関係ない事だ。とりあえずはアキと瑞希に会えばあのじじいも納得するだろ）

理音は自分を捨てた母親になどすでに情の一欠けらもないため、1度、病室に顔を出して研究所に戻るつもりであり、明久と瑞希から聞いた母親が入院している病院に向かおうとした時、

「ミツケタ。マイエンジェル。イエデナンカシナイデオトウサンノムネニカエッテオイデ」

「絶対にイヤですわ！！　近づかないでください。この変態！！」

道路の真ん中をドリルのような特徴的なツインテールの少女を背後におかしな気配をまとった中年男性が追いかけ回しており、

「……おかしい人間が出るのは春だけじゃないんだな。ん？　何か、こんな光景もみた事がある気がするな」

理音は2人の周りに道が開く様子に小さく首を傾げる。

「邪魔ですわ！！　どけなさい。豚野郎！！」

「ん？」

理音は一先ず、自分には関係ないと思ったようで先に進もうとした時に少女は理音に向かって駆け出して来ているだけではなく、理音が邪魔だと罵倒しているが、

「ミハル、ソノオトコハナンダ？　キサマ、マイエンジェルニナニヲスルツモリダ？」

「……意味がわからん」

なぜか、中年男性は理音へ殺意を向けると同時に理音にナイフを投げつけ、理音は表情を変える事なくナイフを弾き落とし、

「おい。あいつはなんだ？」

「放しなさい！！　豚野郎、美春はあの変態に捕まるわけにはいかないのですわ！！」

理音に殺意が移った事で理音を餌にして逃げようとする少女の特徴的に髪を理音はつかむが少女は必至なようで理音のすぐ横で彼を罵倒するが、

「知るか。だいたい、あれはお前の関係者だろ。人を巻き込むな」

「知りませんわ。豚野郎の問題であって美春には関係ありませんわ！！」

理音は美春と名乗る少女に中年をどうにかしろと言うが美春は完全に自分のせいではないと言い切り、

「……コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

そんな2人の様子は中年男性には理音と美春が仲良くしているようにしか映っていないようであり、彼のまとっている殺意はさらに色濃くなっている。

「ん？　やはり、この感覚はどこかで味わったような気がするんだが、まぁ、良いか。俺に敵意を向けたんだ。それなりの覚悟はできているんだろうな」

「ちょ、ちょっと、豚野郎、何をするつもりですか！？」

理音は性格なのか自分に向けられた殺意に小さく口元を緩ませ始めると美春は男性とは対象的に落ち着いた様子の理音に逆に寒気を感じているようで動けなくなってしまい、

「……コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

「ん？　そう言えば、空港で引っかかると言ってじじいに没収されたんだったな」

男性が理音に飛びかかろうとした時、理音は懐に手を入れるが取り出そうと思ったものがなかったようで首を傾げると取り出そうとした武器の代わりに理音の拳は男性の腹に深々と突き刺さっている。

第3問

「ぶ、豚野郎、どうして、あの変態の前で普通に動けるんですか！？」

「ん？　何を言っている。わけのわからん。殺意とか殺気とか言われるものに分類されるものは出てるが、動き的にはただの中年の親父だ」

美春は平然と男性の腹部を殴りつけた理音が信じられないようで声をあげるが理音は美春の言い分がわからないようで首を傾げながらも男性の攻撃を交わしては反撃を繰り返して行き、

「……コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

「ほう。まだ、動くか？　タフネスは上昇していると言う事か？」

理音が男性からの敵意を受け始めてから１０分が過ぎた頃には男性の動きは壊れた玩具のように鈍くなっているがその殺意は治まる事なくさらに毒々しくなっているが理音に気にする様子はなく、

「まぁ、そろそろ、飽きてもきたからな」

「ちょっと、リオ、いつまでも来ないと思ってたら、何をしてるの！？」

理音は男性の相手をするのに飽きたようで止めを刺そうとした時、理音と男性を取り囲んでいる野次馬達をかきわけて明久が理音を呼ぶ。

「ん？　アキか？　相変わらずのバカ面だな」

「その罵倒はいらないからね！！」

理音は自分の名前を呼んだのが幼なじみの明久だと気づいたようで1度、明久に視線を向けた後に彼をバカにすると明久は声をあげると、

「コロス！！」

男性は理音の視線が明久に向かった瞬間を狙ってナイフを投げつけるが、

「攻撃が単調だ。本当に殺したいなら、もっと、頭を使え」

理音は表情を変える事なく投げつけられたナイフを指で挟んで受け止め、

「お前の目的はこれだろ。別に俺はこいつに用はない」

「な、何をするんですか！？　豚野郎、裏切るつもりですか！？」

「裏切る？　バカな事を言うな。俺はお前とは知り合いでも何でもない。まぁ、長い間、座ってたりと身体が固まっていたから、準備運動にはちょうど良かったけどな」

美春の首根っこをつかんで彼女を男性の前に突き出し、美春は助かったと思い始めていた後に地獄に叩き落とされた気分なのか理音を再度、罵倒し始める。

「ふむ。これを引き渡しても効果はなさそうか？」

「こうなったら無駄ですわ！！　放しなさい。豚野郎！！」

しかし、男性の殺意は未だに上昇を続けており、美春はこの場所から逃げ出したいようで理音を罵倒すると、

「仕方ない。じじいに取られないように隠していたものをここで使うか？　まぁ、多少はもったいないが面倒になってきたしな」

「ちょ、ちょっと、リオ、その怪しい注射器は何！？」

理音は面倒になってきたのか懐に手を伸ばすと怪しい色をした液体の入った注射器を取り出し、明久は理音の様子に声をかけるが、

「ん？　気にするな。未承認だがただの精神安定剤だ。成分的にも血中で無害に変わるようになっている」

「未承認とか、危ない事を言わないで！？　だいたい、血中でって通常時だとどうなるんだよ！！」

「……気にするな。だいたい、承認されてたって、効果のない抗がん剤を使っている国なんだ。たいしたことではない」

理音は気にする事なく注射器の針を男性の首筋に差し込むと注射器の中の怪しい色をした液体は男性の身体の中に吸い込まれて行き、男性は糸が切れた人形のように膝から崩れ落ちて地面に倒れ込み、

「アキ、こんな状況を以前に体験した事がある気がするんだが」

「し、知らないよ。良いから、逃げるよ」

「ちょ、ちょっと、豚野郎、放しなさい！！」

理音は明久に以前にもこんな状況はなかったかと聞くが明久はそれどころではないと判断したようで美春の首をつかんだままの理音を引っ張って逃げ出す。

第４問

「吉井くん、前田くんは見つかったんですか？」

「う、うん。姫路さん、見つかったんだけど」

明久が理音と美春を人混みから引っ張り出した時、瑞希も明久と一緒に理音を探していたようで明久に駆け寄り、

「ん？　瑞希か？　……成長したな」

「ど、どこを見ているんですか！？」

「……これだから、男は」

理音は駆け寄ってきた瑞希の強調された同年代と比べると育ち過ぎた１部分（むね）を見て、彼女の成長を確認すると瑞希は顔を真っ赤にして自分の胸を隠すように明久の後ろに隠れ、美春は理音の言葉に舌打ちをする。

「それで、アキ、俺はいつまで捕まえられたままなんだ？」

「あ。ごめん」

「いや、別にかまわんが荷物を取ってこないといけないんだが」

「……本当にごめん」

理音は美春をつかんでいた手を放すと明久にも手を放すように言い、

明久は慌てて理音から手を放し、理音は人混みの中に置いてきた荷物を取りに戻らないといけないなと人混みに視線を向ける姿に明久は理音から視線を逸らして謝るが、

「いや、気にするな。1度、俺は戻ってくるから、ここで待っていてくれ」

「う、うん」

なぜか、理音の口元は小さく緩んでおり、明久はそんな理音の様子に大きく頷き、理音は人混みの中に突っ込んで行く。

「あ、あの。どうして、前田くんは楽しそうなんですか？」

「いや、ボクにはわからないけど……」

「何ですか？　豚野郎、美春を見ないでくれませんか？　気分が悪いですわ！！」

瑞希は理音が人混みに駆け込んで行く姿に首を傾げると明久は美春を一緒に連れてきた事に今、気が付いたようであり、彼女に視線を向けると美春は直ぐに明久を罵倒され、

「ど、どうして、ボクが罵倒されないといけないの！？」

「わ、わかりませんけど、あ、あの、確か、この間、吉井くんのお友達と一緒でしたよね？　どうして、前田くんと一緒にいたんですか？」

「……清水美春ですわ」

明久は自分が美春に罵倒される意味がわからないと声をあげると瑞希は美春とは会った事がある事を思い出したようで理音と何をしていたかと聞くと美春は話をする上で名乗った方が良いと思ったようで自分の名前を名乗り、

「ひ、姫路瑞希です。こっちは」

「豚野郎の名前になんか興味はありませんわ」

瑞希は慌てて自分の名前を名乗り、明久を紹介しようとするが美春は明久の名前など知る必要はないと切り捨てる。

「えーと、清水さんはどうして前田くんと一緒にいるんですか？」

「知りませんわ。あの豚野郎が勝手に」

「……人に罪をなすりつけるな。これはお前の関係者だろ」

瑞希は美春の様子に顔を引きつらせながらも、改めて、彼女に理音と一緒にいた理由を聞くが美春は理音に罪をなすりつけようとした時、沈めた男性を引きずった理音が戻ってくると、

「な、なぜ、その変態を連れて帰ってくるのですか！？」

「ん？　さっき、中に戻ったら警察官にこれはお前の父親だから引き取って貰えと渡されてな」

美春は男性を見て逃げようとするがそんな彼女の首根っこを理音は表情をかける事なくつかみ、

「父娘？」

「お父さんを変態と言うのはどうかと思うんですけど」

明久と瑞希は理音と美春の会話に苦笑いを浮かべる。

第5問

「あぁ。警察官の話だと名物の変態だそうだ」

「……イヤな名物だね」

「そ、そうですね」

理音は今日のような騒ぎはいつも起きているようだと聞き、少し呆れた口調で簡単に明久と瑞希に説明をすると2人は顔を引きつらせると、

「美春だって、名物になんかなりたくありませんわ！！」

「俺に言うな。それより、これを引き取れ。俺達には全く関係ないんだからな」

「イヤですわ！！　そこら辺に捨てておいてください」

理音は美春に父親を引き取るように言うが美春は直ぐに拒絶し、

「イヤじゃないだろ。これは変態でもお前の父親だろ」

「これは変態であって美春の父親ではありませんわ」

理音は美春に『父親』を引き取るようにもう1度、言うが美春は男性を父親だと認めていないようで絶対に受け取る気はなく、2人はにらみ合いを始め出す。

「ね、ねえ。リオも清水さんも落ち着いてよ」

「アキ、ふざけた事を言うな。俺は落ち着いている」

「豚野郎、美春の名前を呼ばないでください。汚らしいですわ！！」

明久は険悪な空気を醸し出し始めた2人の間に割って入ろうとするが美春に罵倒され、

「話がまったく通じないな」

「よ、吉井くん、落ち込まないでください」

明久は美春から浴びせられる罵倒の連続についに心が折れたようで道路の片隅でさめざめと泣き始めると理音は眉間にしわを寄せ、瑞希は明久に駆け寄った時、

「……マイエンジェルトミツメアウダト、ワタシノマイエンジェルニイロメヲツカウオトコ、キサマノゾウモツヲヒキズリダシテヤル」

「……黙っていろ」

「黙りなさい。変態！！」

眠っていた人外が目を覚ますが、無情にも立ち上がる前の人外の腹には理音と美春の共同作業が決まり、人外は予想外の攻撃のため、受け身を取れずに再度、気を失い、

「……なんだかんだ言いながら、リオと清水さんって息が合っているのかな？」

「そ、そうかも知れませんけど、良いんでしょうか？」
明久は瑞希に支えられて立ち上がると理音と美春の様子に眉間にしわを寄せ、瑞希は道路に転がっている人外の様子に顔を引きつらせると、
「と、とりあえず、落ち着こう。道路の真ん中でケンカは不味いよ。ひ、姫路さん、清水さんをお願いして良いかな？」
「は、はい。清水さんも前田くんも一先ず、冷静に話し合いをしましょう」
2人はお互いにつかみかかりそうなくらいに険悪になっている理音と美春の間に割って入る。
「勘違いするな。俺は冷静だ」
「だとしても周りに人が集まってきてるから、リオも清水さんのお父さんは一先ず、道路の脇に寄せておこうよ。名物なら誰か知り合いが様子を見ていてくれるよ」
「そ、そうですね。一先ずは落ち着いて話をできるところに……あ、あそこの喫茶店はどうですか？」
明久と瑞希は頭を冷やすために喫茶店に入ろうとすぐそばにある『ラ・ペディス』と言う喫茶店を指差すが、
「あそこはダメですわ！！」

「そうなの？　それなら」

美春は明久と瑞希が指差した喫茶店を却下すると４人は美春の父親を道路の脇に寄せると逃げるようにその場から離れるが理音だけは逃げる理由がないと言いたげな表情をしていた。

第6問

「それで、どうして、こんな状況なんだ？」

「わかりませんわ」

一先ず、４人は近くに喫茶店に入ると理音と美春は状況が理解できないようで眉間にしわを寄せるなか、

「……喫茶店に入ったのは良い物の。ここでお金を使うと仕送りまで持たないし」

「……どうしよう。どれも美味しそうだけど、最近、太り気味だし、また、吉井くんと話せるようになったのに嫌われちゃったら、困るし」

明久と瑞希はすでに目的を忘れているのかメニューを見てぶつぶつと呟いている。

「アキ、瑞希、それで、俺をこんなところまで呼び戻してどうするつもりだ？」

「呼び戻してって、おばさんの事、心配じゃないの？」

理音はこのままでは一向に話も進まないと思ったようで明久に自分に電話をかけてきた理由を聞くと明久は理音の反応に驚いたようで、メニューから視線を理音に変えて聞き返すが、

「心配？　意味がわからん。だいたい、俺はあの人と縁を切ったん

だ。心配する必要性がない」

「前田くん」

理音はすでに母親になど情はないと言い切り、そんな理音の様子に瑞希は悲しそうに目を伏せると、

「……あの。話が始まったなか、悪いのですが、美春はこの話にまったく関係ないのではないですか？」

「……あれ？　清水さん、どうしてここにいるの？」

「豚野郎！！　あなたが美春を連れてきたのですわ！！　やってられませんわ。美春は帰りますわ！！」

美春もさすがに空気を読んだようであり、自分がここに居ても良いのかと遠慮がちに手をあげ、明久は自分が美春を連れてきた事を忘れていたようで首をかしげ、美春は明久のバカさに彼を罵倒すると喫茶店を出て行ってしまう。

「……アキ、お前、３年ぶりに会ってもバカだな」

「言わないで！？　そんな哀れんだような目でボクを見ないで！！」

「……逃げるな。話が進まん。それに俺は今日中に日本を出たいんだ。早く用件を言え」

「用件って、おばさんに会う事だろ？」

理音は眉間にしわを寄せると明久は恥ずかしさの限界がきたようで

全力で逃げ出そうとするが理音は明久の首をつかみ、自分を呼び出した理由を話すように言うが明久は理音の反応に首を傾げるが、

「意識不明の人間に会ってどうする？　意味がない」

「で、でも、前田くんが行けば、目を覚ます事とか奇跡が起こるかも知れないじゃないですか？」

理音の口から出る言葉は怜奈と会う気はないと言うだけであり、瑞希は怜奈が目を覚ます奇跡を信じているようであり、

「……無意味だな。俺は科学者だからな。奇跡なんてものは信じないし、奇跡が存在しないと言うのはとうさんが死んだ時にイヤと言うほど思い知らされた。どんなに大切な人のために祈っても神は無情で残酷だ。それに考えても見ろ。俺にはあの人のために神に祈るような心は持ち合わせていない」

「で、でも」

理音はそんな瑞希をバカにするように奇跡など存在しないと言い切り、瑞希は理音の反応に瞳に涙を浮かべると、

「そ、それなら、怜生くんのそばにいてあげてください。おばさんとはすれ違ったままでも、怜生くんにとっては前田くんはお兄ちゃんなんです。怜生くん、おばさんが事故に遭ってから、笑ってくれないんです。ずっと、落ち込んでるみたいで、あの時の前田くんみたいにずっと泣くのをこらえてるみたいで」

「そ、そうだよ。リオ、怜生くんのそばにいてあげてよ。ボクも姫路さんも姫路さんとお母さんもなるべく怜生くんと一緒にいるよう

にしてるけど、やっぱり、ボク達じゃ、ダメなんだよ」

明久と瑞希は怜奈の事から話題を怜生に変えた方が良いと判断したようで理音に怜生と会って欲しいと願い、

「……怜生か。わかった」

理音は2人の言葉に小さく頷く。

第7問

「……結局、お前は何がしたかったんだ？」

「う、うるさいですわ！！」

理音、明久、瑞希の３人は喫茶店を出ると美春は復活した父親に追いかけ回されており、理音は既に美春の父親からは『自分から美春を奪って行く男』認定されているようで理音が視界に入った瞬間に美春の父親は理音に攻撃を仕掛けてくるが理音は直ぐに返討ちにし、

「ま、まぁ。清水さんも無事で良かったね？」

「そうですね」

明久と瑞希は目の前で繰り広げられる人外対科学者の勝負に顔を引きつらせている。

「それで……美春と言ったか？」

「豚野郎、あなたに名前で呼ばれる筋合いはありませんわ！！」

「ん？　そうか。なら、人外娘」

「何ですか。その呼び方は！！」

「そのままだろ」

理音は美春と話をしようとするが２人の間ではまともな会話になり

そうもないが理音は美春の反応を気にしていないようで表情を変える事無く、

「それで、これはどうすれば良いんだ。正直、相手をするのが面倒なんだが」

「リオはマイペースだね」

「そうですね」

理音は白目を向いて地面に転がっている美春の父親をどうするか美春に聞き、理音の様子に明久と瑞希は苦笑いを浮かべると、

「おい。お前が引き取らないなら、他に引き取れる人間に連絡をしろ。母親でも何でもいるだろ」

「そ、そうですわ」

理音は美春に父親の引き取り先を探せと言うと美春はそこで初めて気づいたようで携帯電話を取り出して家に電話をかけ、

「豚野郎、しばらく、身を隠しますわよ。どこかに案内しなさい」

「……アキ、今更何だが、こいつも同じように沈めても良いと思うか？」

「は、放しなさい。豚野郎！？　ちょ、ちょっと何をするつもりですか！？　み、美春は女の子ですわよ」

美春は父親が目を覚ます前にどこかに身を隠そうと理音達に案内を

しろと言うが理音にも限界がきたようで美春の首根っこをつかむと喫茶店の裏にあるゴミ箱に美春を投げ捨てようとする。

「良いか。世の中は男女平等に進んでいるんだ。自分の非を認めないとどうなるかお仕置きくらいしても問題ないだろ。お前の変態親父にはお仕置きをしたんだ。おかしな事に巻き込まれた被害者としては反省くらいさせないと納得ができないしな」

「美春は悪くありませ！？　ま、待ちなさい。本当にダメですわ！？　わ、わかりましたわ。あ、謝りますから！？　頭からゴミ箱はダメですわ！？」

理音の行動に声をあげる美春の様子に理音は正当な理由だと言うが美春は反省するそぶりもなく、理音は彼女の頭を躊躇する事無く、ゴミ箱に突っ込もうとすると美春は理音の様子に彼が本気だと理解できたようで声を上げ、

「あ、あの。前田くん、流石にそれは」

「そ、そうだよ。やりすぎだよ」

明久と瑞希は美春を庇おうとするが、

「アキ、瑞希、しつけがしっかりできていないから、初対面の上に助けてやった人間を豚扱いする人間にそこまで何かをしてやる義理はないぞ。それも口先で謝ろうとするなんてふざけたマネをしているわけだしな。それなら、俺も同じ事をしても問題ないだろ。ここでゴミ箱に顔から突っ込まれるか、俺の実験台になるか、素直に自分の非を認めて謝るかの３択で選ばせてやる」

「じ、実験台って何をするつもりですか！？」

理音に聞きいれる気はなく、美春の最後の選択を迫ると美春は聞きなれない言葉に声をあげると、

「できる事なら、いくらでもあるだろ。臨床実験はマウスでのデータがないといけなかったりと面倒な事が多いからな」

「わ、わかりました。あ、謝りますから、ゆ、許してください！？」

理音は邪悪な笑みを浮かべ、美春は彼の様子に背筋が凍るほどの寒さを覚えたようであり、本気で理音に謝る。

第8問

「それで、何で美春、お前が付いてきてるんだ？」

「う、うるさいですわ」

なぜか美春を加えて４人になったメンバーは怜奈の入院している病院に到着すると、

「リオ、こっちだよ」

「あぁ」

明久と瑞希は何度も来てくれているようで先を急いで行くが理音はあまり怜奈がどうなろうか知った事ではないため、気だるそうに２人の後を追いかけ、その後ろを美春が付いて歩く。

（……俺が連絡を受けてからだいぶ経つわだからな。もう目を覚ます事はないだろう）

病室に入ると怜奈の体にはいくつかの機械が繋がっており、その近くのイスに怜生がちょこんと座っているのを見つけ、理音は怜奈の様子からすでに彼女が目を覚ます事はないと考えるが怜生は怜奈が目を覚ます事を待っているようで怜奈の顔を覗き込んでいる。

「怜生くん、お母さんは？」

「……トイレに行くって言ってました」

「そうですか」
瑞希は病室を見渡すと怜生と一緒に病室に来ているはずの自分の母親である『姫路瑞穂』がいない事に気づき、怜生に聞くと怜生は瑞穂がいない理由をトイレだと言うと、
「……」
「……何だ？」
怜生は見た事のない人が2人いる事に気づき、理音の顔を見上げ、理音は怜生の反応の意味がわからないようで首を傾げる。
「リオ、その反応はないよ。怜生くん、お兄ちゃんだよ」
「……お兄ちゃんですか？」
「あぁ。そうなるな」
明久は理音の反応にため息を吐くと怜生に理音が兄である事を教えると怜生は兄がいる事は知っていたようではあるが理音と一緒に住んでいる時は怜生は小さかったため、実感がないようで首を傾げる姿に理音は小さく頷き、
「……兄弟の再会の割にはずいぶんとあっさりしてますわね」
「そ、そうですね」
瑞希は多少、3年ぶりの兄弟の再会は感動的だと思っていたようだが、理音の反応は薄くため息を吐き、瑞希は苦笑いを浮かべる。

「リオ、そんな反応をしてないで、怜生くんとの再会なんだから、抱き締めてあげるとかないの？」

「ん？　そう言うのは必要なのか？」

「……良くわからないです」

明久は理音と怜生の反応にもう少し何かないかと言うと理音と怜生は首を傾げ、

「……何故かはわかりませんが、あの2人が兄弟だと言う事はわかりますわ」

「そ、そうですね」

美春と瑞希は同じ事を思ったようであり、眉間にしわを寄せた時、

「瑞希ちゃんに明久くん？　……理音くんも？　帰って来てくれたのね」

「瑞希、妹か？　俺の記憶には妹がいたと言う記憶がないんだが」

一見、小学生にも見える瑞穂が病室に戻ってきて、理音を見つけて驚きの声をあげるが理音は瑞穂を瑞希の妹だと思ったようである。

「ま、前田くん、私のお母さんです」

「姫路瑞穂です。怜奈さんとは理音くんが海外に行ってから、親しくさせて貰ってたわ。ちなみに前田先生……理音くんのお父さんの

教え子です」

「……母親？」

「……なるほど、確かに血は引いてそうだ」

瑞希は理音に瑞穂を紹介すると瑞穂は理音に向かい頭を下げ、瑞穂が瑞希の母親だとは信じられないようで美春は眉間にしわを寄せ、理音は瑞希と瑞穂の胸を見比べて納得したようであり、

「豚野郎！！　どこを見ているんですか！！」

美春は理音の反応が何か面白くないようであり、直ぐに理音を罵倒する。

第9問

「……」

「リオ、お医者さんの話はどうだったの？」

理音は怜奈の家族として彼女の症状を聞かされるために、医者に呼び出されていたのだがしばらくすると相変わらずの不機嫌そうな表情をした理音が病室に戻ってくる。

「ん？　そうだな。ここの病院の医者もスタッフも無能だった。才能も腕もないのに傲慢な態度、死んだ方が良いのはここのスタッフだな」

「……リオ、聞きたいのはそこじゃないよ」

理音は医者からの説明の仕方や対応が基準以下だと言いたげであり、理音の言葉に明久達は顔を引きつらせると、

「何、あの説明では必要な情報も足りてないからな。カルテや検査結果等、全てを見せるように言ったんだが、ガキに見せる必要はないと言いだしてな」

「豚野郎、何をするつもりですか？」

「その言葉づかいは止められないのか？」

「いふぁい、いふぁいです！？」

理音は明久達の言葉など気にする事無く怜奈の隣に立つと今の怜奈の状態からわかる事だけでも確認しておこうと思ったようでカバンから医療道具を取り出して診察を始めようとし、美春は理音が何をするつもりかわからないため、首を傾げると理音は彼女の頬をつねる。

「美春は女の子だと言っているではありませんか！？」

「何度も同じ事を言わせるな。これ以上、同じ事を言わせるとお前にもアキと同等の評価を付けるぞ」

「……わかりましたわ。納得がいきませんがこの男と同じ評価は生物として最低評価を受けたような気がしますから、今日は美春がひきますわ」

「ちょっと、2人ともそれってどう言う事！？　確実にボクの事をバカにしてるよね！？」

美春は理音の自分への扱いがぞんざいのため納得がいかないようで彼を睨みつけるが理音は気にする様子もなく、怜奈の診察を行いながら、美春を『バカ認定』すると言うと美春は明久に視線を送った後にしぶしぶ頷き、明久は2人にバカにされた事を理解したようで声をあげるが、

「……アキ、お前にバカにされてる事に気づく知能があったんだな。今世紀最大の発見だ」

「まったくですわ」

「あるからね！？　ボクにだってそれくらいの事はわかるからね」

理音はかなり驚いているようで無表情だった顔が小さく歪み、美春は理音に続くように明久を小バカにすると明久への精神攻撃は思いのほか強烈だったようで明久は床をのた打ち回り、

「アキ、そうやって、瑞希のスカートの中を覗き込むのは止めろ」

「よ、吉井くん」

「そ、そんな事はしてないからね！？　ひ、姫路さん、ボクは無実だからね！？」

理音は明久への攻撃の手を緩める事無く、瑞希は理音の言葉でスカートを押さえると明久は慌てて弁明しようとするその視線は瑞希の足に固定されており、

「……これだから、男は絶滅した方が良いのですわ」

「おかしな事を言うな。男も女も片方がいなくなったら種が滅びるんだ。お前はあの変態親父のせいで偏見があるようだがもう少し柔軟な考えを持ってみろ……」

美春は明久の様子に舌打ちをすると理音は美春が男に嫌悪感を抱いているのがあの父親のせいだとすでに割り切っているようでもう少し彼女に視野を広くするように言うと怜奈の診察に集中し始めたのか言葉はなくなって行く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2751y/

サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～Berserker　Princess～

2011年11月19日19時17分発行